

6世紀の日本 (蘇我氏の台頭) [図表P. 50] 年表

1. 6世紀初め(継体天皇期)

◇507年 北陸から継体天皇が迎えられる ← 1 大伴金村 おおもものかなむら が擁立 よりのつ

☆この天皇の即位にはかなり無理がある? [図表P. 382 「天皇系図」]

◇527年 筑紫国造 (筑紫君) 2 磐井 いわい の乱

一時は“火の国”(肥前・肥後)、“豊の国”(豊前・豊後) まで勢力下におく大反乱。

新羅と結びついていたといわれる。

→ 磐井の墓と伝えられるのが「石人」「石馬」で知られた 3 岩戸山 いわとやま 古墳 [図表P. 49] ③

2. 6世紀半ば(欽明天皇期)

540年 1 大伴金村 から、加羅割譲(512年)をめぐる失政の責任を問われて失脚 [P. 34] ②

552年 仏教公伝をめぐり 崇仏派 の 4 蘇我稲目 そがのいなめ と 排仏派 の 5 物部尾輿 もののべのおこし が論争 [図表P. 50] ①

3. 6世紀終わり(崇峻天皇期など)

587年 大臣 6 蘇我馬子 そがのうまこ が大連 7 物部守屋 もののべのもりや を打倒

→ 8 崇峻 すしゆん 天皇擁立 (31代用明天皇につづく蘇我系天皇 P. 35系図参照)

592年 8 崇峻 天皇殺害 (蘇我馬子との対立?)

☆蘇我氏は渡来人との結びつきを強め、彼らの技能により大和政権の財政面を掌握。

〈大和政権の財政管理 = 「9 三蔵 みつくら」(齋蔵、内蔵、大蔵)〉 [P. 34] ④; 図表P. 50] ①

推古朝の政治

☆天皇殺害という異常事態と後継争いによる混乱を避けるため(?)、史上初の女帝が出現。

592年10 推古 すいこ 天皇即位 ———— 攝政11 厩戸王 (聖徳太子) うまやとおう しやうとくだいし

大臣12 蘇我馬子

◇上記12の墓と伝えられる古墳は飛鳥の何古墳? [図表P. 59]

◇ 継体天皇の即位には不明なところも多く、さまざまな継体天皇像が考察されています。ただ明らかに系統的に天皇の地位とはほど遠いところにいた継体天皇の即位に尽力した大伴金村の功績は大きかったと思われます。そのため6世紀初めは大伴金村の存在が大きかったのでしょう。

◇ 継体天皇の没後には蘇我氏が勢力を伸ばします。その要因と考えられているのが天皇との姻戚関係です。図表 P. 50] ③「皇室・蘇我氏の関係系図」を見てみましょう。29代・欽明天皇には蘇我稲目の娘二人が嫁しています(堅塩媛と小姉君)。その二人の娘から生まれた(蘇我氏の血を引く)子どもが天皇となっていることがわかります。

◇ ヤマト政権の政治制度ですでに学んだとおり、政権内には大臣と大連という二大勢力が力を持っていました。図表 P. 50] ①の年表にはそれぞれの時期の大臣、大連が誰であったかということも記されています。その部分にも注目してください。大伴金村失脚後に大連として政権内での存在感を高めたのは物部氏でした。大臣・蘇我氏、大連・物部氏が、仏教の受容問題も絡んで張り合っていく状態が仏教の伝来(538年説と552年説あり)頃から始まるというのが、6世紀中頃の政権イメージとなります。(蘇我氏=崇仏、物部氏=排仏で受験上はよいのですが、物部氏が本当に排仏であったのかということについては再検討が必要であるともいわれています。)

◇ 「ガイド」にも記しましたが、蘇我氏の権力の源として財産管理(三蔵の管理)があげられます。財産の管理のためには渡来人の記録能力(帳簿処理能力)が不可欠だったと思われます。渡来人の協力を得るためには彼らの信仰する仏教を守らないわけにはいかなかった、という蘇我氏の立場が見えてきます。蘇我氏が仏教というものを理解し、信仰していたのかもしれませんが、仏教に対する信仰の篤い朝鮮半島からの渡来人との関係は意識しておくべきでしょう。